

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	掬月 玄
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 『入中論』第六発心の研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	根本 裕史	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	後藤 弘志	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	末永 高康	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	赤井 清晃	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	川村 悠人	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	高橋 晃一 (東京大学)	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、インド大乘仏教中観派の論師チャンドラキールティの『入中論』「第六発心」章で展開される瑜伽行唯識説批判を検討し、そこから浮かび上がる彼独自の世界観を明らかにするものである。</p> <p>論文は序論、本論、附論「翻訳研究」より構成され、本論は全四章と結論よりなる。序論では『入中論』における瑜伽行唯識説批判の概要を与え、主な先行研究を概観した上で、本研究の目的と方法を示している。</p> <p>第一章では法処色、すなわち第六識の意によって捉えられる物質的要素について論じている。伝統的な説一切有部の見解では律儀等の無表色のみが法処色として理解されていたが、瑜伽行派では不浄観の対象等も法処色の構成要素として追加され、さらにチャンドラキールティの『入中論』に至ると、夢の中で経験される色形も法処色と理解されるようになったという歴史的経緯を論述した後、後代のチベット学僧ジャムヤンシェーパが試みた瑜伽行唯識説と『入中論』の記述との和会通釈の妥当性を検証することにより、夢の中に現れる色形を認識外部の存在要素とみなすチャンドラキールティ独自の見解の意義を明らかにしている。</p> <p>第二章では幻や影像といった迷乱知の把握対象について論じている。初期経典『相応部』、大乘経典『十地経』、瑜伽行派論書『大乘莊嚴経論』等を経て『入中論』に至るまでの議論の流れを祖述し、さらにそれらを俯瞰的に捉えるジャムヤンシェーパ『大中観』の記述を検討することにより、チャンドラキールティが幻や影像の所在を認識外部に位置付け、なおかつそれらに因果効力と空性という二属性を共に認める点で、説一切有部など他の仏教学派には見られない独自の考えを持っていた可能性を指摘している。</p> <p>第三章では業異熟の不可思議性について論じている。初期経典『増支部』の記述を検討し、瑜伽行派論書『阿毘達磨集論』と『入中論』に見られる不可思議性の解釈を比較することにより、チャンドラキールティは各々の行為からいかなる果報が発生するかという問題への考察が凡夫にとって能力的に不可能であるというよりも、むしろ原理的に不可能であることを強調した上で、業果の因果関係そのものは否定しないという独自の立場を示すことを明らかにしている。</p>			

第四章では、一水四見の譬喩に現れる餓鬼等の認識について論じている。チャンドラキールティによれば、餓鬼等の認識という喩例は唯識無境説を証明するための根拠にならず、人が見る水、餓鬼が見る血膿、諸天が見る甘露はいずれも各自の認識の外部に存在すること、ならびに彼が示唆するそのような多元的世界観はインド後期密教文献『ヴィマラプラバー』の説と親和性を持つことを、ジャムヤンシェーパ『大中観』等のチベット文献に基づいて検証している。

結論では、チャンドラキールティが夢の中の色形、幻、業異熟、餓鬼等が認識する血膿といった存在要素を認識外部に認めることで、『ヴィマラプラバー』に説かれる後期密教思想と共通の多元的世界観を有していることを指摘している。

本論文は、『入中論』を中心に据えながら、初期経典、大乘経典、瑜伽行派論書、後期密教文献、チベット撰述註釈を広く精査することにより、従来の研究では主題的に論じられることのなかった中観派チャンドラキールティの世界観を解明した点で画期的である。各章の論述の連関を示す説明の不足といった若干の不備も認められたが、大乘仏教中観思想の知られざる側面に新たな光を当てた独創的な論文として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)